

〔後中内記〕享保二年七月十二日御目出度事也。少將雖當番頭痛氣ニ付、小番御盃等申入御理了。

〔日本歲時記七五〕十三日 生見玉なまきの祝儀として、玉祭より前に、おやかたへ、子かたより、酒さかなをおくり、又饗をなす事あり、いつの世よりかはじまりけん、今の世俗にする事なり、死せる人はなき玉をまつるに、今いける人を相見るがうれしきとのこゝろなるべし。

〔年中行事歌合〕十九番略 右 孟蘭盆 同十五日

前大納言

今日とてや内藏の司もそなふらん玉まつるてふ七月半に

〔兼載雜談〕一于蘭盆の歌

後の世にまよふ諸人こよひこそいでし都の月をみるらん

又歲暮にも玉まつるとよめり、玉祭の事、一年中に十六度あり、

〔春雨樓詩鈔九江門節物〕茄牛瓜馬 七月自十三至十五家家祭其先、必有茄牛瓜馬、用茄瓜截芝蔴加

四足者、

野情轉不在、馳驅靈仗排來猶要扶、遮莫呼牛又呼馬、祭餘其奈比芻狗、

〔翁草八〕川村瑞軒成立之事

川村瑞軒事、元は車力十右衛門として、常に車を押て世を渡る傭夫也。略 或時不圖思ひ付キ、上方

に行て身の安否を究んと、僅の諸道具を賣て、金貳三步肌に著け、小田原迄來て一宿せしに、相宿に老翁あり。略 十右衛門つらく、此翁を見るに、唯者ならぬ氣性顯れければ、忽得心して、實も

翁の異見尤也、然らば江戸にて一と勵致して見んと、翁に別れて江府へ引返し、品川を通りけるに、折節七月益過ぎにて、瓜茄子夥敷磯端に流れ寄りしを、不圖心付て、其邊の乞食共に錢を取らせて取上ゲさせ、所縁の所にて古桶ケを借り、右の瓜茄子を鹽漬にして引かづき、毎日普請小屋江行き是を賣る、大勢の日傭共晝食の菜に、我もくと競調るに仍て、夫々段々瓜茄子の漬物を